
夢幻一夜の月に酔う

李兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻一夜の月に酔う

【Nコード】

N0423Z

【作者名】

李兎

【あらすじ】

戦国BASARAの夢やNLやら、友情ものがメインの短編集。例によって作者の願望が溢れ返っています。とりあえず色々書きなぐってるので注意。長編番外も連載する（つもり）よ！↑

「fast」

こんにちは、お久しぶりです（・ω・）

長編ネタが行き詰っているようなそうでもないような、倦怠期つかスランプです李兔です。

『蒼天依存症候群。』ではお世話になっておりますが、この度は暇つぶしと称して短編集を作成しちゃいました。

長編のスピノフやら夢小説やら、新作（笑）の試し読みだったりと、好き勝手載せるつもりです。

蒼天ryの主人公、葵さんの前世版のお話もちまま載せていきます。基本は夢とNL、友情ですおw ある意味女性向けなのでご注意ください。破廉恥ならぶも書くから逃げるなら今の内だよっ☆（待ちなみに書き方統一してないけど許してね！ だって決めてないんだもの、改行無しかったり好き勝手分けてたり、でもBASARAだってことは言い切れる！↑

捨て駒の自己満足ばかりですがザビー様のような生温かい目で見守って頂ければ本望です。まあ今までの経験上、短編集はなかなか自由ですフリーダムです。……お覚悟なされよ！

ではでは、皆様に少しでも戦国BASARAの魅力が伝わることを願って。

20111201 李兔

嘲笑う貴方を（この腕の中で殺めてしまおうか！）（前書き）

初っ端からグロくてすまそ……！

流血表現あるので苦手な人は注意です。先に言います、蘭丸ファンの方ごめんなさい。私も彼は好きです、弟です（待て

嘲笑う貴方を、この腕の中で殺めてしまおうか！

錆びたような鉄の臭いが肺の中に充満し、思わずむせ返りそうになる。恐ろしく気分が悪い。戦場などという場には、今日初めて訪れた訳では無い。今更何を、と自らを叱咤してみるが、あまりの気持ち悪さにそれさえも考えられなくなった。ダメだ、今はもう任務だけを考えよう。でないとやってられない。

口元を覆う布を今一度締め直し、袖口に隠した苦無にそっと触れる。ひんやりとした冷たさは熱に火照った体には気持ちよく、真紅に染まった指先でさえそこから離せないでいる。これはまだ、使ってなかったっけ。そうだ、まだ至近距離まで迫られていないんだ。

ひっそりと逃げ込んだ影暗闇から、そっと苦無を持って鈍い光を放つ一閃を描くだけ。かなり距離はあったはずなのに、奏でられる断末魔は耳元に響き渡った。嗚呼、なんて悍ましい。なんて哀しい、なんて恐ろしいんだ。

「……さてさて、これからどうするかな」

出陣の合図である法螺の音はもうだいぶ前に鳴らされた。が、夕日が傾き、戦場を茜色に浸すその刻まで、今日の戦は終わらないのだろう。頭上にて刺々しい閃光を放つ日輪を睨みつけ、深いため息を吐けばどうしようもない遣る瀬無さに襲われた。——と、視界の端にちらりと映る家紋に目を見張る。

此処は戦場より少し離れた森林の中。気を付けるべきは忍であって、このような足軽では無い。否、今ここにいる兵士たちは恐れるに足らないのだ。——青白い顔色に真紅の化粧、放り出された手足が何よりの証拠になる。降りて確かめるまでもないが、それぞれ両

軍の家紋を背負った兵士たちは無残にも息の根が止まっていた。大方どちらかの兵士がこの森林の中に隠れていて、それを見つけた一方が攻め入ったのだろう。だがそれにしても謎が残る。少ないと言えど、この人数の殺し合いを終えて生き残った兵は、すぐに戦場に戻ったのだろうか。普通ならば此処、もしくはこの近くにて休んでいるはず。にしては——気配が感じられない。嫌な予感がする。忍の勘が当てになるものなのかどうかは定かでは無いが、これは強者が現れて一気に勝負が付いたと考えたほうが良いだろう。しかも、敵も味方も巻き込んで殺めてしまうような——婆娑羅者のような、厄介な輩が。

「とすれば、もう戦場に戻ったと考えるのが普通だよ……——“普通”なら」

唐突にその禍々しい殺気を纏い、疾風の如く空を翔るそれを指で挟む。刃の先に塗られた紫が、相手が己をどうするつもりだったのかを物語る。艶めいた紫色が己の肌に突き刺さった時、血と共に巡る悪しきものにこの命は尽きるのだろう。刃に身を引き裂かれる痛み、じんじんと呻く毒の痕。死については覚悟を決めているが、自分が殺そうと嘲笑する輩がいるのだと考える度に背筋が凍りつく。自分は忍だ。主君の影となり、無を貫き通す者。その為に己を殺す忍はこの日ノ本に五万という。それならば一人くらい、心を持つ者がいても良いじゃないか。苦しむのも涙を呑むのも、己ただ一人と言うのなら。

「ボクに何の用だ。——早く主君の元へ帰るべきだと思うよ」

「うるせえ！　もうバレてんだから顔見せろ、それともそこで射てやろうか！？」

まだ顔に幼さが残る少年——森蘭丸は、その毒々しい紫の艶を放つ弓をこちらに向け、獣の如く吠えた。憎悪に燃えるその瞳を眺め、すっと冷えていく心を認める。傷つくのは己だけだと知っていた。だからこそ無意識に、自分を護ろうと自己防衛本能が働くのを黙認してきた。

なんて弱い自分。なんて浅はかで、脆い人間。

「お前なんか、蘭丸一人で充分だ……！」

絞られた標的は自分、その矢を握る手が震えているのが此処からでも見えた。あと少し後ろへ退けば、そこはもう死ぬる場所、戦場であるというのに——なんて静かな森なんだ、此処は。

「お前なんか、お前なんか……っ、」

「魔王の子ねえ。思ってたよりガキみたいだから、最期に慈悲でも与えてやろうか」

「黙れ！ 蘭丸と勝負し——」

憎悪を宿していた瞳が、純粹な驚きからか見開かれる。前髪を結っているからだろうか、澄んだ瞳をよく覗くことができた。一気に縮まったこの距離では彼の体の震えも心情も、悟ってしまうにはあまりにも容易い。凍えた吐息が己の唇に掛かる。静かに微笑を浮かべたが、近すぎるこの距離では彼に披露することは不可能だろう。

「良い？ ——これはボクの慈悲だ」

わざわざ懷に手を伸ばし、乾いた血が張り付いたままの苦無を漁る。子供の首筋にひたと押し当てれば、わかりやすいくらいビクリと大きく揺れた。

「きみの仲間を殺めたこの苦無で、——楽に逝かせてあげる。だから、」

ボクを恨まないで、この乱世に生を受けた輪廻の波を呪ってね。

一瞬にして視界を覆う真紅を、——舞い乱れる鮮血を、その美しさを、その残酷さを。空虚な胸を貫くそれに重ねて目を伏せる。我ら忍に残るもの。それはきつと、何処へも還ることができない最期の“無”、ただ一つだろうと嘲笑^{わら}って。

嘲笑う貴方を（この腕の中で殺めてしまおうか！）（後書き）

ちなみに作中の語り手は、葵さん／戦国ver. だったりする。

いつか彼女の紹介も載せたいですが、どうも長ったらしい……or

z

――そして帳は降りる（前書き）

佐かす、ですが佐助は未登場。イメージは謙信×かすが（↓）佐助。

——そして帳は降りる

眩いばかりの月明かりが、己の影をより一層濃くさせる。

今宵は生憎、新月には程遠い日和。偵察をするには向いておらず、大抵の忍は断念せざるを得ない宵だ。が、今日に限ってそんなことは言っていられない。敵が動いた。先日 of 戦は痛み分けだった為、しばらくは動かないだろうと踏んでいた我々が甘かった。まだ兵は進行していないはずだが、場合によってはそれも時間の問題。いち早く新しい情報を手にし、あの方にお届けしなければ——そうすればきつと、あの方は喜んで下さる。あの方が傷つく事も無い。一度、そのように考えてしまうと浮足立つ心を抑えることが出来なくなつた。

我が脚よ、もっと速く、疾風の如く夜を切り裂け。我が感覚よ、あの方の敵になるものをいち早く察知し、この手で蜂の如く突き刺してしまえ。

焦る身体と求める心。なんて矛盾しているんだ。——己の事ながら笑ってしまう。今は任務遂行を優先しなければ。嗚呼、なんて鬱陶しい月明かり。気が散るだけだ、もし月影なるものが存在するのなら、この身もどうか隠してくれ。月光なんて、明るみなんて——ふいにアイツの声が頭蓋に反響し、くらりと眩暈がした。

『並の忍は月を嫌う……だが俺様は別さ』

気取りやがって、とは思うが。そう考えられる思考が一時、羨ましくもあった。

『空にお前が居る限り、この影も絶えはしない』

地上に映されるその影を全く苦にせず、寧ろ己の象徴なのだと笑っていた。あの冷ややかな目で、ひっそりと浮かべられた微笑に何度この背が凍りついたことだろう。

武田の事情などに興味は無いが、アイツはアイツで良い主君に恵まれたと思う。あんな惨い覚悟が決められるだけの人間なのだ。謙

信様の足元にも及ばないだろうが、佐助なんぞの価値観と同じ扱いにしてほしくない。

——だけど、だ。

「……アイツなんか、敵に見つかって苦労してれば良いんだ」

嗚呼、今だけは宵の空にぽっかりと浮かぶ月に変化したい。あの調子づいた影を誰よりも濃く映し出し、月影なんぞには埋もれさせてはやらない。ふざけた猿色さるいろの悪夢は御免だが、天の狐に化かされるつもりも毛頭無いのだ。

月になってアイツを照らして、困らせてやれたらどんなに楽しいか。ふいに口元が綻ぶ。面白い、いつか試してみようか。頭上に輝く満月を眺め、ひっそりと笑みを深めた。

『わたくしのうつくしきつるぎよ……おまえとみるつきが、わたくしはいちばんすきなのです』

——あ、あれ？ 何故だ、私。

月になって一番最初に照らすべきは謙信様だろう？ なのに私は今、誰を思い浮かべた？ 誰を照らしたいと思った？ 私は——わたしは誰の頭上で輝きたい？

「そ、んなの……」

認めないぞ。誰に放ったかもわからぬ呟きは、影となった漆黒の闇夜に波紋を広げ、溶けるようにして消え逝く。最初から、何も無かったかのように。

――そして帳は降りる（後書き）

佐助の片想いよりはかすがの片想い派です。女の子の切ない片想いって超可愛いじゃないですか!？（自重

夢見た絶対幸福論（前書き）

筆頭夢でヒロインの名前は出してないです。つか葵さん。名前出さないで書こうと思ったら、意外といけましたね。ただ筆頭がMY設定により相当歪んでるので注意。

夢見た絶対幸福論

「アンタは、母上によく似ている」

ぽつりと呟けば、傍らのくノ一はあからさまに眉を潜めた。

コイツもオレの母上のことは知っている。だからその意味を理解したのか、不思議そうに首を傾げた。忍なのに呼び出され、話し相手にまでされ「時間外労働」だと訴えても命は下り続ける。そこまですされているのに、自分は大嫌いな母上に似ていると言われる。不可思議で堪らないだろうが、今のオレはコイツに報酬を払い、雇っている主君の身。逆らうことは許されない。

そして今日も、月見酒の晩酌につき合わされる。矛盾する言葉の意味を、その裏を知ること無く。

「嫌いなら、あまり呼び出さないでよ。黒脛巾組の輩に恨まれるから」

「文句は言わせねえよ。あいつらもアンタも、オレの部下だろうが」
あ、そう。

冷たくあしらわれ、残りの酒も仕舞われる。大方、酒を控えさせろと小十郎に言われたのだろう。冷てえなと言いつ返せば、無言で「特別手当はどうした」と訴えられた。つたく、忍つてやつはどいつもこいつも薄給なのかよ。

「……そういう我の強いところも似てるぜ」

「義姫様に会ったことないから、よくわからないけど。嫌いなヤツと酒を飲むのは、趣味悪くない？」

「別に嫌いとは言ってねえだろ」

「だったら、片倉様の小言増やす前に和解すれば良いのに」

和解、か。そうだな、アンタがオレに笑ってくれたら文の一つで

も送ってみようか。

けらけらと乾いた笑みを零しながら言えば、独眼竜は厄介だなと呟いた彼女。拒否さえしなかったが、その顔を笑顔が彩ることは、オレの前ではまず無いのだろう。

この右目を失うまで、母上がオレに向けた愛情は異常なものだった。それこそ花よ蝶よと育てられ、当事者であるにも関わらずこれはやりすぎじゃないのかと不安になったこともある。そうだ、オレは母上の慈愛に満ちた優しい眼差しを知っているのだ。ほんの一時の、短い春の夢のようなそれを。

でも今はどうだろうか。母のせいで失ったものは、代えの利く物なんかでは無い。まだ幼かった弟の命は、灯を一息で消すように呆気なく奪われた。それもオレのせい、なのだ。右目を失くしたことで母親を錯乱させた、オレのせい。

でもオレは知っているのだ。記憶の中のオレに向けられた、その瞳の中の優しさを。

だから、――だからまだ消えない。幸せだった時間のほうが短いというのに、梵天丸と呼ばれたあの月日を、化け物と叫ばれ苛んだあの日々を。

「やっぱり似てるよ、アンタは」

あんたもオレが嫌いなんだろう？ 金を払う者と払われる者と、そんな言葉でしか表現できない関係に、あんたがしているんだ。オレがどれだけ、その重ねられた防御線の内側に入り込もうと考え、そして落胆してきたか知らないくせに。誰にも見せたことがないその弱みを、オレが護ってやりたいと願っていることを知らないくせに。――「武士」だから「忍」だから？ オレが聞きてえのは、そんな拒絶の言葉じゃねえってあんたが一番よく知ってるだろ？

本当に似てる、よく似ている。恐ろしい程に酷似している。仕草とか声とか目とかじゃなくて、オレを遠ざけようと一定の距離をいつも保とうとするところが。でも気付いていないだろうが、たまにオレをその庇護下に本気で置こうとすることか。忘れそうなほど薄い記憶の中で、あんたがオレに向けた『愛』とか『信頼』とか、言の葉で表すには不十分なものとか。似すぎているんだ、涙が零れそうになるくらいに。

あんたはオレを嫌ってる。（母上が拒絶し、そして殺めようとしたように）

あんたはオレに声を掛けようとしないうし笑わない。（オレには見せない笑顔も仕草も、すべてオレは知っているのに）

あんたは、己に向けられているオレの歪んだ『何か』を悟ってる。（だから逃げようと足掻くんだろう、隻眼に浮かぶ歪な灯があんたを求めているから）

でもな、あんた“達”は知らねえだろうけど、オレはまだ諦められねえんだよ。オレは我が儘だからな、諦めたくねえしそんなあんたらに負けたくもねえ。欲張りでも往生際が悪いとでも罵倒すりゃあ良いいさ。これだけは、覚えとけ。

どんなに罵倒されても恨まれても妬まれても嫌われても拒絶されても笑ってくれなくても突き放されても泣かれても逃げられても。

——オレは、あんたみたいな人を愛さずには生きられないんだ。

『梵天丸、母の下へお出で。その顔をよく見せてくれ』

あの夢のような日々を、思い出という枠に収めておけないから。

『独眼竜、怪我は無い！？ 無茶ばかりするからでしょ！ もう、ほんと困らせるなよ。……でも、』

どんなに儚い記憶だとしても、忘れる訳にはいかないから。

『——きみが無事で、本当に良かった』

刹那にも満たぬ間に向けられた愛を、無かったことにはしたくない。

夢見た絶対幸福論（後書き）

個人的に筆頭は女大嫌い母上大嫌い。でも大切な人だから愛さずにはいられなくて、でもそれを認めたくないみたい。今回は思いっきり認めさせましたがw

（うちの歪んだ）筆頭が好きになるとしたら、他人を地位とかで位置づけない人。人の人間性を見て好きになる気が。それ故、主人公が男だとしたら怪しい路線に走っちゃうw

だから無意識に、恋愛対象が自分を憎んだり嫌ったりとかいう人になっちゃう。ただ、頭良いので敵作らないような人間関係は築ける。よってくる女のあしらい方は知ってるけど、惚れちゃうのは筆頭嫌いばかりみたい。な。

小十郎はそれを知ってて苦労してると良いな☆みたい。な妄想です↑
改めて思うけど、このMY設定かなり歪んでるなあwどうしようw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0423z/>

夢幻一夜の月に酔う

2011年12月3日18時03分発行